

『医方類聚』に引用された『傷寒論』は北宋小字版だった The Shanghan Lun Cited in the Uibang Yuch'wi was a Northern Song Small Character Edition

真柳 誠 Makoto MAYANAGI (茨城大学)

『傷寒論』は北宋政府が 1065 年に大字本を初校刊、1088 年には小字本も校刊したが、これら北宋版は現存しない。ただし『翻刻宋板傷寒論』(翻宋本)が明・趙開美の『仲景全書』(1599)に収録される。翻宋本は前付の牒文から 1088 年版の小字本系統とわかり、南宋および趙開美の付加が混入することは 2015 年の本総会で報告した。

一方、朝鮮医書を代表する『医方類聚』266 巻は漢字圏において最大巻数の医学全書。世宗の命により文官と医官が 1443 年より編纂を開始し、1145 年に 365 巻の稿が成った。1459 年からは底本の俗字・異体字まで忠実に踏襲する厳格な校正がなされ、1464 年に撰集が完成した。しかし歴大かつ錯誤の許されない書ゆえ、1477 年にやっと全 266 巻の活字版 30 組が進上された。これが李氏朝鮮時代ただ一回の出版で、宮内庁書陵部に 1 組 250 巻 252 冊、その欠落部に相当する 2 冊がソウル郊外の韓独医薬博物館に現存する。

本書は中国医書の引用文を類編する。153 種以上の引用書は成立が唐・宋・元・明初にまたがり、うち 40 種ほどはすでに現存しない。現存書でも、本書の所引底本は佚伝した古版本の場合が多々ある。それゆえ散佚書の復原、古医籍の校勘に有用で、幕末の考証学者は本書を存分に利用・研究した。本書は原本以外に、幕医・喜多村直寛(1804-76)の木活字版(1861)、韓国・東洋医科大学の直寛本模写影印版(1965)、台湾の韓国本縮印版(1979)、北京・人民衛生出版社の直寛本活字版(1981, 2006 重校再版)、北京・九洲出版社の直寛本影印版(2002)の各版がある。しかし韓国模写本と北京活字本は誤字・脱文・書式などの問題があるため、本検討では宮内庁の朝鮮版原本を使用した。

三木栄は本書に『傷寒論』の引用(類聚本)があるのを報告したが、その詳細は未検討だった。そこで調査すると、本書巻 28・42-45 は、『傷寒論注解』(1144 序、金版ないし元版)から、経文と成無己注文のほぼ全文を引用(注解本)していた。さらに成無己が省略した細字双行の北宋〔割注〕を「洪〔傷寒論註曰一作浮〕」のごとく、注解本の経文中に割注で補記。また注解本にない薬方・方後や成無己が省略した不可篇の経文を、「傷寒論」を冠した 1 字下げ書式で付記し、行頭から記す注解本の引文と区別する。これら類聚本『傷寒論』の経文・注文を翻宋本と校対したところ、以下の相違や特徴が明らかになった。

類聚本の字句は翻宋本とほとんど一致する。たとえば唐政府本は皇帝・李世民の避諱で洩を洩に改字したが、北宋の校刊では洩を洩に戻している。しかし翻宋本 7-19a-10 に「能洩奔豚氣」の 1 例外があり、対応する類聚本 44-90a-6 の「(傷寒論…)能洩奔豚氣」も同字だった。こうした一致傾向より、類聚本も翻宋本と同じ小字本系と判断できる。

一方、前 3 世紀の『五十二病方』から北宋までの医薬書は杏_人・桃_人の薬名ばかりで、杏_仁・桃_仁は敦煌出土の唐代医書に数例がみえるにすぎなかった。すべてを「仁」で記すのは南宋紹興年間の官版『和剂局方』からみえ、元代から一般化する。そして翻宋本は 5-16b-3「桃仁〔二十箇去皮尖及両_人者〕」、10-11a-4「杏仁〔二十四箇湯浸去皮尖及両_人者〕」の 2 例以外、みな杏仁・桃仁に統一されている。これだけ徹底した統一は南宋政府の校定本だけが可能なので、翻宋本の底本は南宋版系と判断できる。他方、類聚本は 43-16b-3「(傷寒論…)杏_人〔五十枚去皮尖〕」と 44-91b-5「(傷寒論…)加杏_人」と記述するので、北宋版系と推定できる。さらに翻宋本 9-3a-3「除中〔亦云消中〕」の誤字を、類聚本 45-9b-2 は「除中〔傷寒論註曰一云消中〕」と正確に記し、類例は他にも多い。

以上ほかより、『医方類聚』が引用する『傷寒論』は北宋小字本系、趙開美『翻刻宋板傷寒論』は南宋小字本系と判断できた。